

謹賀新年

株式会社 トモグリーンケミカル
第160号 2020年1月6日発行
当社Webサイトにて
バックナンバー掲載中
<http://www.tomo-green.com/>



旧年中は、弊社商品をご愛用頂きまして誠にありがとうございました。
本年も界面活性剤を始めとした管理資材や技術力で、
ターフメンテナンスのサポートに努めて参りますので、
より一層のご支援、お引き立てを賜りますようお願い申し上げます。



1月・2月の管理ポイント

グリーンシナジー

タンクミックスにお勧め

グリーンシナジーは根圏土壤の隅々まで水を届ける働きがあるので、肥料、ミネラル、糖、アミノ酸などと混用すれば、水と一緒に養分も根圏の隅々まで行き渡ります。与えた養分を無駄なくベントに届けるには、グリーンシナジーのご使用がお勧めです。経済的な資材なので、散布の度にご使用頂けます。

使用量：1~2ml/m²/月 散布水量：100ml~1ℓ/m² 使用方法：資材の散布時にタンクミックス

土壤水分環境を整えましょう

レボ (REVO)

冬場は降雨や灌水が減り土壤中の水分が少なくなりがちです。おまけに空気が乾燥しているので、土壤の乾燥が思っている以上に早く進んでしまいます。土壤が乾燥すると、土壤中にある撥水予備軍（濡れていると撥水しないが乾くと撥水が強くなる物質）が強い撥水性を示すようになり、急激にドライが進んでしまいますので、冬場でも適度な土壤水分を保持し続けることが重要です。界面活性剤を処理することで適度な土壤水分を保持し続けやすくなります。

使用量：2ml/m²/月 散布水量：200ml~500ml/m² 散布回数：1ヶ月に1回~2回

乾燥・過湿から
グリーンを守りましょう

プライマーセレクト

土壤全体に水を行き渡らせ、土壤中の余分な水の排出を促します。土壤水分のバラつきを改善し、ベントグラスが生育しやすい土壤水分状態を維持します。レボよりも土壤表層の水分を少し高めに保ちます。

使用量：2ml/m²/月 散布水量：200ml~500ml/m² 散布回数：1ヶ月に1回~2回

冬季のサッチの除去
土壤微生物の健全化

サッチ・マネージャー^{ウィンター}

本剤は自然界に存在する微生物の中からサッチ成分に対して優れた分解能力があり、低い温度でも活性の高い有用菌を選抜した微生物資材です。低温期のサッチ分解能力が高く、春期の気温が上がる時期までにゆっくりとサッチを分解します。サッチマネージャーと、季節ごとに使い分けていただくことがおすすめです。

使用量：グリーン0.25~0.5g/m² 散布水量0.2~0.5ℓ/m²

自然な色調の着色剤

カラーメイト F-20

カラーメイトF-20は、従来品に比べ、季節感を重視した落ち着きのある自然な色調（ダークグリーン）に仕上がる着色剤です。物理性（固着性、速乾性、色持ち、色乗りetc）や安全性にも優れています。お求めやすい価格なので、フェアウェイなど広範囲でもご使用いただけます。

使用量：50~100倍 100~200ml/m²散布

芝生の耐乾性
耐寒性を高めましょう

リーフシールド

リーフシールドで茎葉部をコーティングすると、蒸散を抑制し、芝の乾燥を防ぐと共に葉面温度の低下を軽減出来ます。着色剤と組み合わせると、葉面温度が上昇し霜が早く溶けます。

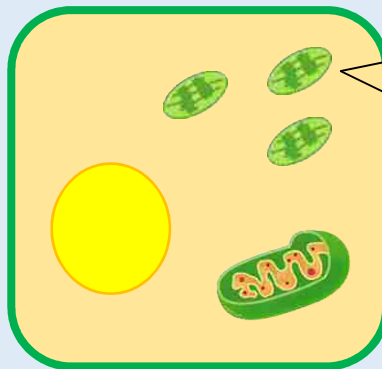
希釈倍率：200-400倍 散布水量：100~300ml/m²

芝生の冷害と凍害について

気温が低い冬季の芝生では低温や霜、凍結等によるダメージが発生します。低温による障害は凍結しない程度の温度で発生する冷害と、凍結することで発生する凍害に区別されます。今回は、冷害・凍害発生時に芝生が受けているダメージについて紹介します。

冷害

芝生が凍結しない程度の低温にさらされると、各種酵素や光合成の活性が低下し様々な障害が発生します。



芝生の細胞

・光合成の低下

光合成に関する酵素の活性が低下し、強光ストレスを受けやすくなる。成長の遅れや停止につながる。

・葉の脱色

低温により葉緑体に異常が発生し、崩壊していく。

・細胞膜等の透過性が高まる

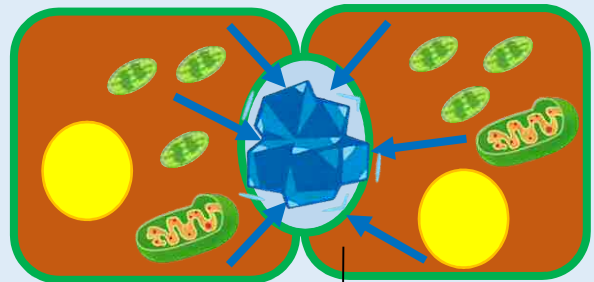
細胞内の成分や水分が滲出してしまふ。

凍害

氷点下の温度にさらされた芝生は、細胞内外に氷が出来ることにより大きなダメージを受けてしまいます。

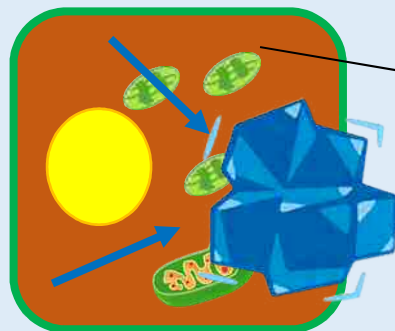
・細胞壁や細胞間隙の水が凍結した場合

細胞が氷に水を奪われることにより、脱水収縮する。細胞内の酸度が大きく変化し、小器官に影響を与える。



・細胞内の水が凍結した場合

細胞内の脱水症状を引き起こす。氷が細胞(葉緑体、ミトコンドリア等の小器官や細胞膜等)を傷つけてしまう。



氷に水分を奪われ、細胞が脱水症状を起こす。

水の動き

芝生は細胞内に糖やプロリンなどを蓄積することで、体内水分の凍結に備えます。秋の施肥時に肥料に加え栄養剤等を使用し貯蔵養分を増やすことで、芝生の耐寒性耐凍性を高めることが出来ます。また、夜間にカバーを掛け直接低温から守ることも効果的です。

冬場のダメージは表面に現れにくく見逃されがちですが、放置すると春の立ち上がりに影響が出てしまうので十分な対策が必要です。